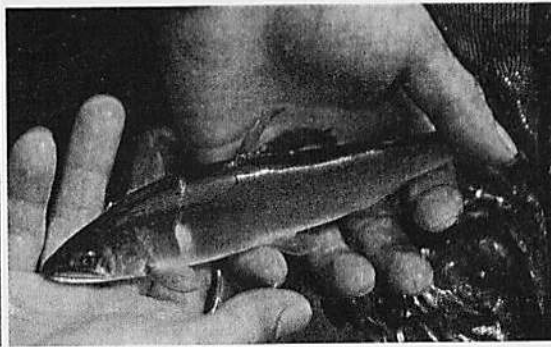


沼沢勝善・小国川漁協組合長を悼む



「元気な魚たちが泳ぐ自然のままの川、全国各地から釣り人が来てくれる活気溢れる川を孫子の代まで残したい」と言うのが沼沢組合長の口癖だった。



山形県小国川の漁協組合長であり、ダムによらない治水を訴えて川を守ってきた沼沢勝善さんが去る2月10日に急逝された。小国川漁協を巡っては、本誌3月号でも詳しくお伝えしたとおり、ダム反対を貫く漁協に対し、昨年末に「小国川ダム賛成にまわらなければ漁業権を更新しない」という、実質的な脅しにも等しい圧力が掛けられたことがある。沼沢さんは、ひとときわ小柄ながら、いつも笑顔絶えず、「最上小国川は、ダムのない川であるが故に、ことさら『清流小国川』として広く知れ渡り、最上町と舟形町のかけがえない観光資源であり、流域の人々に計り知れない多くの恵みをもたらしていることは誰もが認めることであります。小国川漁業協同組合は、川に生息している魚族の生態系を守る事及び繁殖保護に努めることを使命として、永年努力しております。ダムが造られれば、これまでの自然環境に変化を及ぼし、特に河川の生態系に悪影響が及ぶことを回避することはできません。豊かな自然

環境を後世に引き継ぐため努力している私共小国川漁業協同組合は、ダム建設を看過することはできないのです」という組合の主張を常に先頭に立って貫いてきた。結果的に県の手法に対して多くの批判が集まったことや、手続き自体が違法ともいえるものだったことから漁業権は更新されたが、年が明けてから開催された県と漁協の協議会でも、県側のかたくなな姿勢はまったく変化を見せおらず、沼沢さんにはかなりの心労があったという。

今も県内外から3万人のファンが訪れるとされるアユ釣りに関しても、小国川のアユを冷水病にしてはならない、川の力を失ってはならないとして、早稲湖のアユを断り、小国川産、山形県産のアユを育苗して放流する、現在各地で見直されている地元根付いた放流事業を全国に先駆けて率先して行った功労者として知られている。

なお、小国川ダムに関しは、上流の赤倉温泉地区の洪水対策という名目で計画がなされたものの、過去にこの地区で起きた洪水被害が、ダムにより防げる種類のものでないこと、さらに現在県が提案している穴あきダムであっても、目詰まり対策の不完全さやそのほかの問題点の見落としがあることを複数の専門家も指摘している。また、漁協は全国でも希少なダムのない川という環境を維持しながら、そのうえで必要となる治水の方策については一貫して具休案や協力を表明しているにもかかわらず、「ダムありき」の県が漁協の提案をいっさい聞かない構図が続いている。あらためて沼沢さんの志を強く胸に刻むとともに、心から冥福をお祈りしたい。

2月12日に行なわれた葬儀には漁協関係者ら約150人が参列。最上小国川の清流を守る会共同代表で、小国川ダム建設反対にともに力を尽くしてきた草島進一県議会議員も、故人の人格を忍びせる弔辞を読んだ。沼沢さんの人格や業績もよく伝えるその一部をあわせてお伝えしたい。

「私が沼沢さんにお会いしたのは、平成13年最上小国川ダムを考える懇談会の時からです。その懇談会はその時、ダム推進を述べていたのは沼沢さんを中心に3名。その後の流域小委員会には10人の委員に囲まれた中で一人、沼沢さんだけが、小国川や赤倉温泉で起きている真実を語り、ダムによらない治水を訴えておられました。多勢に無勢の説明会、公聴会でも、どんなヤジが飛んでも、誹謗中傷がいわれなくても、ダムによって、小国川そのものの力を失うことは、ここを訪れる人、ここに住み続けたいという人の幸せを奪うことにつながるのだ、と、未来に、手渡すべきものを見据え、情熱と、そして微動だにしない、ぶれない信念をもって、理路整然と、堂々と意見する姿がそこにありました。放流アユとしての琵琶湖のアユを断り、小国川産、山形県産のアユを三瀬で育苗して放流する、自然の営みを大事にしたアユの放流事業を全国に先駆けて率先しておこなったのは、沼沢組合長、貴方でした。森と川と海をつなぎ、本来の「川の力」を失わせない漁業振興。山形県内の内水面漁業で、全国的にも評価を受ける、最も優れた漁業振興の方策を先駆け、実践してきたのは、紛れもない小国川漁協であり、その一番の貢献者が、日々川や漁協の仲間の事を思い、漁協を導いてこられた貴方です」